

# 村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

## 第14回村野藤吾賞 選評

馬頭町 広重美術館 設計 隈 研吾

宇都宮で新幹線から東北本線に乗りかえて、三つ目の氏家駅で下車。そこからタクシーで東に約25km。鬼怒川、そして那珂川を渡り山間の道を走る。馬頭町はこの美術館以外は長閑に狭くのびる農地だけを印象に残す。ホームページの案内のみを頼りにして行った。

「平成7年1月の阪神淡路大震災に被災された青木藤作氏のご遺族から、歌川広重の肉筆を中心とするコレクション寄贈の申し出が馬頭町にあったのは、平成8年4月のことでした。青木藤作氏は、明治3年に栃木県塩谷郡熱田村狭山田（現、氏家町）に生まれ、肥料店を佐久山、氏家、西那須野で営み、実業家として成功するかたわら、広重の肉筆画や版画をはじめとする美術品を収集された人です。ご遺族は、コレクションを一括して所蔵、展示してくれるところへの寄贈を望まれていました」と、この美術館の成り立ちが紹介されていた。

道路に面した広い駐車場越しの一段上がった地に、東西に低く長くのびる美術館の輪郭は、八溝杉の細い木格子＝ルーバーで包み込まれ、この建築を成立させる他の全ての要素を視界のとどかない内側に包み消している。コレクションの寄贈者 青木久子氏は、「地元の自然素材を可能な限り用いること。馬頭町の核となるような、町内、町外交流の場となる」という二つの条件を示されたと聞く。

建築家は、外観とそれに続く半内部の全てを、杉のルーバーで包み込んだ。この計画のすべては、この30×60mmの断面をもった杉格子からはじまったと言う。宇都宮大学の安藤寛教授の協力を得て、地元の八溝杉を遠赤外線燻煙乾燥させた上に、耐火・防腐の薬剤処理をし、燃焼実験を重ね、建設大臣の個別認定を得たものであり、無塗装のような木の質感を確保するとともに、耐火・防腐は、適切なメンテナンスにより半永久の抗力を発揮することに成功している。

一般の建築の計画が、周辺から建築全体、そして細部へと意向を進めるのに対し、ここではこの小さなエレメントから全体計画に拡げるというスタートを見せる。そして見る人に先ずこの部材、そしてその集合、さらにその全体へと刮目を送らせる。作者はさらに言う。「ルーバーがつくる粒子感は広重の浮世絵に通じると感じた。北斎のような強い色彩と形態を用いることはなく、細い線と小さな点を用いて、広重は自然（たとえば雨や露）の繊細にして曖昧な表情を映し出した。その方法を建築という道具を用いて、木材という具体的な物質を用いて追いかけていきたいと願ったのである」と。

この建築の素材は、さらに他の地元産の自然素材の使用を誘っていく。柔らかい照明と間仕切りの役割をつくり出している隣町産の烏山和紙、素朴な床を表現する芦野石等。その自然素材の可燃性、劣化、変色等の独特な諸々の欠点に対し、古い知恵、新しい技術に細心を用いて対応し、自然そのものがつくるように、繊細な表情を想わせる空間をつくり出す姿勢が一貫している。それらは広重の世界にゆらぐ自然の光と優しく重なり合うのである。建築家の言うこの建築を貫く「広重の道」は、この町の静謐な文化の道として発祥させていることが感銘をさらに深める。この道は街の中に計画されてつくり出されたものでなく、格子の間からにじみ出る光が静かに自然の時間の中で変化しつづけるのがこの建築であるように、町のゆったりとした時間と同調しながら発生し、成長する文化の道を想わせる。

平成13年3月

村野藤吾記念会 代表 池原義郎